

# 彙報

## 佛教學第一研究室

□十一月十七日午後一時より本研究室内に於て第一回學會を開催す、當日本研究室教授並に本學教授學生等多數の來會あり、

般若と淨土教の關係

加藤教授

講演後種々質問應答ありて午後四時半散會す。

□十一月廿九日學長室に於て研究室總會を開く、本研究室より稻葉日下兩教授出席あり、當日は研究室新館移動につき各研究室の配屬場所移動期日等を議す。

□十二月九日午後一時より第二回學會を開催す、當日は本研究室教授、主幹、學生監井學生等多數來會あり。

眞俗二諦論

齊藤教授

後質問あり四時半散會す。

□一月二十九日午後一時より學長室に於て本研究室豫算會議開催す、出席教授、河野、大須賀、稻葉、金子、廣瀬、上杉、日下諸氏並に助手。

□二月七日午後一時、會議室に於て第三回學會開催す、

他力の意義

大須賀教授

教授學生等多數來會あり、後茶話會を開き質問應答二時間餘頗る盛會裡に四時散會す。

以上 (物部記)

## 佛教學第二研究室

□一月三十日(金曜日)左の講演ありたり。

一、澆末思想に對する一考案

(特に印度神話に現はれたる劫波說)

泉教授

聽衆數十名極めて盛大なりき。先づ氏は神話と宗教との關係を討究して現代宗教は宜しく神話と分離すべきを極論し、恰く梵語原典と印度文學との交參を考證して親鸞の正像末和讃に及べり。

## 人文學研究室

□拾壹月拾參日午後三時より本學第十二教室に於て史文會大會を開く講題及び講師次の如し、

一、南海交通と六朝佛教との關係 玉井教授

一、注音字母に就いて(蓄音器使用) 倉石教授

□二月五日午後三時より史文會例會を開く、

一、印光の淨土敎

名畑敎授

□二月廿六日午後三時より第六敎室に於て史文會例會開催、内藤雋輔敎授は「南宋時代の都市生活」てふ演題にて二時間餘に亘り面白い研究を發表せられた、後、玉井敎授五高に轉任せらるゝにつき送別會を催す。

哲學研究室

□本室研究學會は左の通り連月開催し漸次内容的に盛大に向ひつゝあり。

十一月十七日午後六時半より

支那に於ける復古學

青木晦藏君

十二月十五日午後六時半より

R. Otto の著 “Das Heilige” について

木場了本君

一月二十九日午後七時より

「社會意識」の否定につきて

五十嵐信君

二月二十五日午後七時より

思惟と直觀

安藤州一君

三月七日午後一時より

本日は、都合により本月例會を休會し、本學年度最後の本會茶話會を開く。その目的は哲學科敎員及

同科學生の諸氏相互に哲學科授業上、本會發展、研究室入室、等に就き意見の交換、質問應答を重ね懇談裡に本學の發展を期せん爲めであつた。さうした主旨の爲めに學部長稻葉園成氏敎務課長細川憲壽氏の參會を得、木場、阿部、谷内、務台諸氏の哲學科敎授、學生多數の來會を得、以て三時半盛會裡に所期の一端を達し得て散會した。

□尙又昨年度において當局が多額を投じて本館の西南に建設中であつた相當に廣さを持つ一新屋が新年の交に完全に竣成された。最初は使用目的が未決定であつた所在來の研究室の利便の都合新學年度敎室割の都合等に因り幾分の缺點不滿感ぜられつつ同新屋を以て當分の中研究室として充用する事に餘儀なく決せられ遂に學年終了後一寫千里にそれを遂行した、かくして昨年暑休已前より問題になつて居た研究室の移轉も完了し單獨に研究室のみにて一屋を占有する事となつたのである。

因に哲學研究室には今新學年より支那哲學の入室を見洋和の書うつ高く揃へられて居る。殊に昨年末において社會學に關する書籍の多數購入を得益々同室は日を重ぬぎ共に、内容も充實され、敎授、學生共

に研鑽を深めて居るが尙研究室の極限的利用を望んで止まない次第である。(三月二十二日記)

### 宗教制度研究会

本會は去る大正十三年十月大谷大學内に設立さるゝところにして、一般宗教の制度に就き研究の歩を進め過去の制度史より現在の各宗教の諸制度を剖檢し、宗教が將來如何なる制度を有つべきかに就て究尋せんとするのである、毎月一回大谷大學内に例會を開く。

阿部現亮氏の「米國に於ける各教會の制度特に其經濟的の制度に就て」山邊習學氏の「英國教會の制度に就て」の研究發表あり、木場了本氏の「獨逸新教々會の成立の意義」に就ての講演は同氏病氣の爲近く開催の筈、因に二月已來大谷派の問題紛糾する處あり本會は適時研究の主題を之に注ぎ三月四日左の如き聲明書を本會の名に於て天下に發表した。

### 聲明書

一、我等は現下大谷派の時局問題を討究し、その紛糾は主として「宗制寺法」の不備にあることを看取し、茲に多年の懸案たる、宗憲の改正を以て唯一の解決法なることを信ず。

二、宗憲の改正は眞宗原始教團の精神に基き近代の社會生活に順應して合法的に大谷派、本願寺、及び大谷家の分域を明瞭にすることを骨子とすべきものなることを信ず。

三、此精神を骨子とする宗憲によりてのみ教團發展の實を招致し一派教化の大任を達成し得べしと信ず。

### 理由書

目下紛糾せる大谷派の現狀は、嘗に一派人心に不安と危懼の念を與ふるのみならず、社會の風教上より見るも洵に遺憾に堪えざるの次第である。

斯かる事態を惹起したのは、畢竟問題の楔點を逸し徒らに當面の事實に拘泥して其解決を求めやうとするからである、よしやかうした方法から一時的の苟安を見るにしても、それは根本的に禍根を除くの途ではない、私達は茲にその所信を聲明して最善の解決を希ふものである。

因に、本會々員氏名左の如し、

稻葉圓成	稻葉道意	蜂屋賢喜代	河崎顯了
梶浦眞了	加藤智學	沼波政憲	古賀制以智
赤沼智善	山邊習學	河部現亮	藤井默慧

藤波太圓 谷内正順 木場了本 藤岡了淳  
橋川 正 細川憲壽 太田 力

會員二名以上の推薦に依り隨時入會を歓迎す。

### 七星會

本會は初め史蹟踏査會と稱し、橋川教授を中心に、學部學生を以つて組織した居たのであるが、今春七星會と改名し單に史蹟踏査のみならず、廣く史學の研究會をなし、専門部、豫科の有志者をも會員にする事にした。

□鞍馬寺見學 昨年十一月末、皇后陛下が同寺へ行啓されたので、陛下の行啓後二三日間、一般に寶物を拜觀せしめたので、好期逸す可らずと云ふので、急に十一月廿八日に同寺を見學をした。突然であつた爲、人員は少なかつたが、橋川教授の懇切な説明と同寺の丁寧な待遇とは共に甚だ有難かつた。尙同寺の歴史、寶物等は近く出版さる可き鞍馬寺史(橋川教授著)に詳しく出て居る。

□太泰寺見學 十二月七日、晴朗な初冬の一日を太泰寺に送つた。來會者廿餘名。彫刻及び古文書に注意す可きものが多かつた。同寺は南北朝時代に、鞍馬寺が南朝方であつたのに對し、此は北朝方であつ

た。其で古文書に見える同じ兎徒と云ふ語が、鞍馬寺のものは北朝を意味し、太泰寺のものは南朝方を指して居る等は、又深き興味を生ぜしめた。同日講師橋川教授。歸途妙心寺を見學した。

□西本願寺見學 一月十八日午後一時から、四時間餘同寺に於いて、雄大な桃山時代の繪畫彫刻を觀賞した。尙當日は橋川教授の紹介で、禿氏龍大教授が説明して下さつた。(T生記)

## 最近佛教研究論文

(大正十三年自九月至十二月)

### (A) 原典研究

法華部大觀(上)	本多 日生	倫理講演集	二六五
撰時鈔抄出略註	小林 一耶	法華	二ノ九六
大智度論の古本に就いて	禿氏 祐祥	龍大論叢	二五七
密友書の研究	本田 義英	龍大論叢	二五七
十住毘婆沙論小論攻	龜川 教信	龍大論叢	二五七
蓮社高賢傳に對する疑義	佐々木功成	龍大論叢	二五七
英譯「阿彌陀經」	宇津木二秀	龍大論叢	二五七
佛典の民衆化	深浦 正文	宗教と思想	二ノ三
梵文楞伽經を讀みて	泉 芳城	宗教と思想	二ノ三
法華經史上に於ける龍樹(上)	本田義英	宗教研究	一ノ二